

一 次の文章を読み以下の問いに答えなさい。

数年前、母が入退院をくりかえしていた時期があった。入院中の母が、きまって私に言ったせりふがある。もし私に何かあったら、家に残っているキルトだのなんなの、私が作ったものは迷うことなく捨ててしまつてね。

母がそう言ったのにはわけがある。母には二人の姉妹がおり、この二人とも、和裁やら洋裁やらやつていて、彼女たちが亡くなったとき、ア膨大な手作り品に母はずいぶん悩まされていたからだ。① 処分したいができず、しかし手元にあるといつまでもかなしい。

(*)、という言葉は、きっと母が彼女たちに言われたかった言葉だったんだろうと思う。

人は死ぬがものは残る。残った物品の中の故人の形跡は、生きている人を慰めることもあるが、ときに意味もなく苦しめ、かなしませもする。ものを作る人は、だれかをかなしませようとして何かを作り上げるわけでは決してないのに。

私に何かあったらすべて迷うことなく捨ててね、とやはり言い残して、母は亡くなった。その言葉は、使つてほしいのではない、作りたいから作ったのだという言葉と、私のなかで等しく響く。料理にしる、針仕事にしる、何かを作り上げる作業というのは、ときとして人を幸福にさせる。シュークリームを食べきれないほど作っていたとき、アランセーターを編んでいたとき、ちいさなオ端切れをつなぎ合わせてキルトを作っていたとき、母は幸福だったのだと思う。② 母ではなくて、ひとりの女性として、幸福だったのだ。幸福のおすそ分けだから、無理に使うことはないのだと母は言っていたのだろう。

私は今、レース編みもセーターもキルトも、ひとつずつを残して何も持っていない。母の言葉通りみな処分した。(A)は痛まなかつた。なぜなら私はすでに知っているからだ。それら仕上がった「物品」が母を幸福にしたわけではないのだと。

かつて母が家族のためにせつせと作った料理やお菓子は、当然ながら今はない。けれどそれらは私の内にある。舌が、(B)がきちんと覚えている。セーターもキルトも同じ。ものがなくても、母が味わった幸福は、私の内にある。私の目は、(B)は、背を丸め編み針や縫い針を動かしていた母の姿と、そこに流れていた幸福な時間をきちんと知っている。失いようがない。③ 捨ててしまつてね、ときらりと言った母の、その思いやりをこそ、私は大切にとつておくべきなのだ。

(角田光代『水曜日の神様』より)

問一 二重線部ア、オの漢字の読みを答えなさい。

問二 傍線部①の理由について説明した次の文の空欄にあてはまる語句を指定字数で本文中より抜き出さない。

(理由)二人の姉妹が残した物品には(五字)があるから。

問三 (*)にあてはまる語句を本文中より十字で抜き出さない。

問四 傍線部②を説明した次の文の空欄にあてはまる語句を本文中よりそれぞれ二字で抜き出さない。

母親として（ 1 ）のためだけに作るのが目的だったのではなく、一人の女性として作ることそのものが（ 2 ）だったのである。

問五 「（A）が痛む」で「悲しみでつらく思う」という意味になるように（A）にあてはまる言葉として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 頭 イ 首 ウ 歯 エ 胸

問六 二カ所の（B）はいずれも二つ目の主語となっており、「思い出」に残っているということを表している。（B）にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問七 傍線部③について、母は「あること」を理解していたから「捨ててしまっただけ」は娘の筆者への思いやりとなったのである。「あること」が記述されている一文を本文中より探し、最初の五字を抜き出さない。

問八 母に対する筆者の思いの説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が二人の姉妹の手作り品に困った気持ちを筆者も味わうことで母と共感している。
イ 筆者は母に与えられた幸福感を今でも忘れず、自分も子どもに伝えようとしている。
ウ 筆者は母が残した物から自分との共通点に気づき、母への思いを胸に刻んでいる。
エ 筆者は母が作った物から母の過ごした幸福な時間を感じ取り、思い出にしている。

二次の文章を読み以下の問いに答えなさい。

これからは発信力がものを言う時代になり、コミュニケーションが重視されることになる。だが、日本は、途方もなくコミュニケーションのできない社会になりつつある、というのが、私の認識だ。

かつて、情報化社会になり始めたころ、情報化が進むと異文化理解が深まると言われたものだ。インターネットが発達すると、遠くにいる人と瞬時に交流できるようになる。そうになると、別の価値観を知り、異文化を理解できるようになり、コミュニケーションの幅が広がっていく。そのように言われた。小論文の入学試験にもそのような問題が出たし、私もそのように教えた記憶がある。

だが、実際に進展しているのは、まったく逆の状況だ。

情報化に伴って、むしろ、別の考えをする人とは付き合おうとしなくなり、同じ価値観を持つ人だけコミュニケーションをするようになった。いや、これはコミュニケーションとさえ言えない。コミュニケーションというのは、別の価値観の人間を知り、理解しあったり、対立したり、妥協したり、説得しあったりすることによって成り立つ。

現代の子どもたちは別の価値観を拒否する。だから、自分と異なる価値観の人には耳を傾けない。そして、狭い世界に閉じこもり、広い視野を持たない。だから、自分と違った考えを持つ人を理解できない。他人の考えに好奇心を持つこともない。まさにコミュニケーション不全が起こっている。

インターネットの中には、同じ価値観の人で固まり、別の価値観の人が紛れ込むとみんな罵詈雑言ばりぞうごんを浴びせかけて追いつけず排他的なサイトが山のようにある。多くの若者が携帯メールを使って、のべつ幕なしに仲良しとだけメールをやりとりしている。

いろいろな立場の人と知り合い、別の価値観を知り、理解しあったり、対立したり、妥協したり、説得しあったりすることがない。むしろ、自分と異なる価値観の人には耳を傾けず、初めから拒否する。そして、狭い世界に閉じこもり、他人に関心を持たない。他人がどんな人なのか、どんな考えを持っているのか、想像してみようと思わない。

だから、自分と違った考えを持つ人を理解できない。自分が常識と思っていることを否定するような考えがあることを想像してみることすらない。

こうしてコミュニケーションを拒否し、自分たちだけで自己満足し、発信しない社会が出来上がりつつある。

もちろん、このままではいけない。これからは、まさしくコミュニケーションの必要な時代なのだ。これからはコミュニケーション不全社会を改善し、一人一人が発信を上手にしなければならぬ時代になる。もっと言えば、上手に発信した人が生き残れる時代になる。そうした社会を作り出すのが、私たち国民の急務だと私は考えている。

(樋口裕一『発信力 頭のいいサイバール術』より)

注

罵詈雑言・・・きたない言葉で悪口を言うこと。
のべつ幕なし・・・ひっきりなし。

問 コミュニケーション不全社会とは、どのような社会と筆者は考えていますか。八十字程度でまとめなさい。ただし、「価値観」・「関心」・「発信」・「拒否」・「狭い世界」の五つを必ず用いること。(順序は問いません)